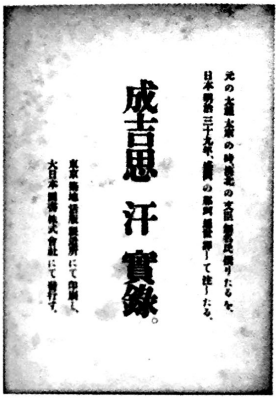
# II－4　モノづくりの道具－『元朝秘史』の研究

栗林　均

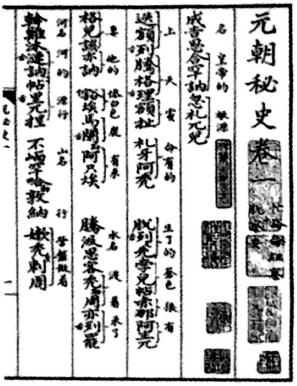
一昨年（二〇〇七年）は、盛岡藩出身の東洋学者那珂通世博士が『成吉思汗實録』（図II－4－a）を上梓してから百年目の年であった。『成吉思汗實録』は、一三世紀にモンゴル帝国を築いたチンギス・ハン（成吉思汗）の一代記を中心に、モンゴル族の祖先からオゴダイ・ハンまでの事績を伝承と韻文を織り交ぜて記録したモンゴルの歴史書で「モンゴル秘史」とも呼ばれる。その冒頭は、「上天より命ありて生まれたる蒼き狼ありき。その妻なる慘白き牝鹿ありき。」という幻想的なモンゴル族の始祖伝説で始まる。これが井上靖の小説『蒼き狼』のタイトルになったことは周知のとおりである。

「モンゴル秘史」は、一三世紀の著作と考えられるが、現存するのは一四世紀末に漢字の音をもってモンゴル語を表記したもので、漢語で『元朝秘史』と題されている。漢字でモンゴル語を表記するやり方は、漢字本来の意味に関係なく、その字音を使ってモンゴル語の音節を表記するもので、これは日本の万葉仮名と同じやり方である。

モンゴル語を表記するのに漢字を用いたのは、当時モンゴル族が文字を持たなかった為でもなく、モンゴル族が表記に漢字を用いていた為でもない。それは、元朝に替わって中原を支配した明朝の




図Ⅱ-4-a：『成吉思汗實録』(1907年) 中扉




図Ⅱ-4-b：『元朝秘史』の本文

翻訳官らが、モンゴル語を学習・教授するために宮廷の書庫に蔵されていた「モンゴル秘史」をテキストとして、モンゴル語の発音をすべて漢字で表記し、漢語による逐語訳と要約を付してできたものであった。同じ時期に同じやり方で『華夷訳語』というモンゴル語の語彙集と文例集も編纂されている。

那珂博士は『支那通史』（一八八八年～）を執筆中に、古代から元代に至り、その資料の乏しさに頓挫していた折、中国に滞在していた内藤湖南博士から『元朝秘史』を贈られ、僅かな文法書と辞書を手がかりにモンゴル語を独習して全訳と注釈を完成させた。これがすなわち『成吉思汗實録』であり、世界で最初の『元朝秘史』のモンゴル語からの外国語訳となった。

日本のモンゴル学はこのような基礎の上に成立し、その輝かしい伝統を継承してきた。筆者は、このような『元朝秘史』（図Ⅱ－4－b）を言語学・文献学の観点から研究している。二〇〇一年に本センターから出版した『「元朝

図II-4-c：『「元朝秘史」モンゴル語 全単語・語尾索引』（2001年）

図II-4-d：『「華夷訳語」（甲種本）モンゴル語 全単語・語尾索引』（2003年）

秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』（九五四頁）（図II－4－c）は、漢字表記モンゴル語原文とそのローマ字転写を見開きで対照し、ローマ字転写の本文データに基づき、コンピュータによって作成したモンゴル語の全単語・全語尾の索引である。

また、二〇〇三年には、これと同じ方針と方法で『「華夷訳語」（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引』（xxiv＋一七八頁）（図II－4－d）を出版した。

さらに、本年（二〇〇九年）出版した『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』（五三八頁）は、『元朝秘史』のモンゴル語の全単語索引に、原文の漢字表記とそれに対する漢語の訳語を付したものである。

モノづくりの匠たちは、新しいモノを作る際に、目的に合った道具を自作するという。これらの著作は、まさに筆者が『元朝秘史』のモンゴル語を研究するための必要に迫られて自作した道具類に他ならない。これまでに『元朝秘史』と『華夷訳語』のモンゴル語と漢字の使用に

ついて発表した筆者の一連の論考は、これらの道具類なくしては成り立たなかったものである。それらは、筆者の研究にとって手放せないものであるが、望むらくは他の研究者にとっても使い勝手のいい工具として役に立つことを願っている。

（『東北アジアニューズレター』第四一号、二〇〇九年七月掲載）

追記

ひとつの文献の言語を研究する際に、信頼できる索引は何にも増して強力な手助けとなる。上の文章は、『元朝秘史』のモンゴル語の研究のために、自分で必要な索引を制作して利用してきたことを綴ったものである。筆者は、『元朝秘史』の索引を含めて、二〇一七年までに二〇余点のモンゴル語・満洲語文献の索引と資料を制作・公刊した。

上の文章を補うとともに強調しておきたいことは、「索引」は「道具」であるに止まらずひとつの「作品」にもなり、「索引制作」はそれ自体が研究とみなし得るということである。文献のテキスト（表現）を単語や語尾といった適切な単位に分析し、それらが同じものか別のものか判定しつつ分類する索引制作の作業は、文献の緻密な読解と校訂無くしては成り立たない。索引制作と文献研究は表裏一体の作業であり、そうした研究が凝縮された索引は、ひとつの「作品」と呼ぶにふさわしい価値があるものとなる。筆者が自戒をこめて心に銘じてきたことは、索引は制作者の研究程度が反映された存在であるということである。